

あっち向いて…ホイ!

田 畠 敏 道



ジャンケンポン!

あっち向いて…ホイ!

だからさあ、違うんだってば。なかなかこっちを向い

てくれない。私が「こっちだよ」って言うとおっち

向いちゃうし、その逆もあったり

新しい指導要領になって、やっと私の指差している方向に相手が少しずつ向いてくれるようになった。

私の相手は、小学校教育である。

新指導要領になるまで、いくら職員会議などで今後の

考え方はこうなんですよなんて言っても誰も見向きもし

てくれなかったのに……。

たとえば、かの悪名高き初任者研修での話。

小学校の指導案の展開の項目は、それまでの慣例で大方が「学習活動」と『指導上の留意点』であったのを、

私が四年前に研究授業をする時に「そこは、『教師のかわり』にします」なんて指導案検討の席上で言っていると、当時の指導教官は「そんな指導案は見たことがな

い。ちゃんと『指導上の留意点』にしなさい」とか何とか言って強引に直そうとした。私が強固に受け入れなかったのでそのままの形で授業に臨み、その研究会ではその指導案のことや挙句の果てに私の指導を受ける態度の悪さ（これは尤もだと言う人もいる）までケチョンケチョンに言っていました。

ところがどっこい、最近になって「ほらみたことか！」なんていう状況になって来た。

新指導要領の登場である。

私は、わりと根に持つタイプなので、今は定年退職してしまったその人に、大きな顔をして数年前の指導案と今年いろんな人が書いている指導案を送り付けてやろうかと思っているくらいだ。

とはいっても、私としては、項目だけが変わっただけに思えている。なぜなら、大方の教員の頭の中はほとんど変わっていないように思えるからだ。そのよい（悪い？）例が、世間一般の職員室にわりと沢山いる「生活科の教科書に出ているからうさぎを飼わなくちゃ」とい

う『指導要領見ないで教科書の指導書しか見ない状態』の教員の面々である。

そもそも前出の指導案の書き方のくだらないこだわりに限らず、その近辺から派生している小学校教育の根本的な間違いは、学習をその主人公である子どもを見ずに、如何に効果的に教えていき中学校につなげていくかという点にあるのではないか。各種の研究会では、あいも変わらず指導法の工夫や教材の開発などで重箱の隅をつつくような研究会が各地で行われている。

そんなことをする前にもっと他にやるべきことがあるのではないだろうか。つまり学校のあり方であり、そこに勤める教員の頭の中の変革である。

例えば、幼稚園で一日中遊んで来た子どもたちが、小学校に入学した途端、毎日時間割が決められていて、しかもその時間が四十五分に区切られている。子ども自身の気持ちになって考えたらこれは相当のストレスがたまるところではないだろうか。そこについては何も検討せず、また疑いも持たないでくだらない研究をやっている。こ

んなことを平気でやっている教員の頭の中は絶対に変革されるべきである。

そんな状況の蔓延していた小学校教育の大本が改定され、低学年の従来の社会と理科よりも（絶対的ではなく相対的に）子ども寄りのスタンスに立った生活科を始めとする見直しが行われたのは、溺れる者の擱んだわらなのか、はたまた一筋の光明なのか……。

常々思っていることなのだが、今までの教育は、より上の学校から下りて来て考えられたものではないだろうか。「小学校は中学校から」「中学校は高校から」という具合。

それがやっと本来の主役である子どもにその視点、が向けられ、本来あるべき姿の教育になりつつあるのではないだろうか。

もともと、幼稚園で毎日毎日遊んで来た子どもたちはその中から知らず知らずのうちに何かしらを学んで（教師の意図したところやそれ以外も含めて）育って来た。朝起きてから夜寝るまで、ひよっとすると夢の中まで？

遊びどっぷりの子どもたち。

その子どもたちが来た小学校は、その子どもたちに合わせて教室があり、学習があり、遊びがあり、行事があり、学校の存在があるべきはずなのに……。

ところがこの小学校、こともあろうに四十五分単位に変なチャイムがなりやがる。「これが勉強始めの合図ですよ」なんて嘘を教えてそれに従わせようとする。オイオイ、あれはただ、お前さんたち『先生』が時計が読めないからだろう。

子どもが字を覚える必要性も持たないままにいきなり『あ』から始まる国語。

教科書をひらくと、何だかわからないうちに悩み（問題）が出ている算数。人の悩みを子どもが解かなくてはいけない。

せっかく幼稚園の先生方が、泥まみれになって沢山の遊び（経験）を沢山教えて（援助して）来てくれたのに、その遊びは休み時間に追いやられて、それ以外の場合は学習である。休み時間の存在は、果たして遊びと学

習の区別のためだろうか。授業時間と休み時間の区別は幼稚園にはない。発達段階上の必要な区別といえればそれまでかもしれない。じゃあ、低学年のうちにも明確に区別をつける必要があるのだろうか。

知人の幼稚園の先生に聞いた話だが、今回幼稚園も指導要領が変わったそうで、その時に今まであった六領域の見直しがされ、新しい五領域がつけられたようである。その指導書を読んでみた。そして読み比べてみた。内容や表現に『もっと子どもを見つめて。子どもの活動ではなくて子ども自身を見つめてほしい』と感ぜられる表現が随所に見られた。その点からも、どうも以前の幼稚園の教育は、小学校よりであったように、幼稚園が小学校よりであったというのを感じてとても面白く思ったものだ。

ただ、たとえば小学校が新指導要領の考え方に基づいて完全にそちらに持って行ってしまったら、さぞかし世間の親御さんたちはあたふたしてしまうのではないだろうか。

うか。どういう見かはわからないが、やたらに私立志向である。たとえば、うちの学校に家庭を持って子どもがいる教員がいるが、例外なくみんな公立の中学校に通っている。そしてそれよりも小さな子どもも例外なく公立の小学校に通っている。ところが自分の担任している家庭の親たちは、何人も（これでも私の啓蒙活動が効果を奏してか、比較的少なくなっただが）中学を受験させようとしている。で、家庭の事情には首を突っ込まないけれど、遊び盛りの子どもたちが不憫でならない。もっともこの傾向が、親や子ども自身の確固たる意志の基にあればそれほど憂うことではないのだが。

いつになったら、親や教員の皆さんがたは、子ども自身のことを見てくれるのだろうか。

私は、今日も職員会議で心の中で『どっち向いてんだヨ……オイ！』と思いつつ、穏やかな表情をつくって『あっち向いて……ホイ！』とやっているのである。

（東京都目黒区立大岡山小学校）